

# ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・ レリーフにおけるミルラの木について

古 川 桂

## はじめに

歴史上「どこに存在したかわからない国」というものは、感興をそそるものである。古代エジプトの歴史においてプントと呼ばれた地域は、「どこに存在したのかかわからない国」であり、古代エジプト人がプントを「神の地」とも称したことから、より神秘的な雰囲気をもとうようになった。そのためプントに関する研究は、「謎の国プントはどこにあったのか」を明らかにしようとすることに集中してきたと言っても過言ではない<sup>1)</sup>。反面、プントの位置を特定することが、古代エジプト史においてどのような意義があるのかについて、語られてくることはほとんどなかった。それは、プントの位置を研究するための最重要史料となっているデル・エル・バハリのハトシェプスト女王葬祭殿に刻まれた通称「プント・レリーフ」(図1)においても同様のことが言える。

このプント・レリーフは、数百年間にわたり中断されていたと考えられるエジプトとプントとの直接交易を前1470年頃に再開させた様子を描いている。レリーフには、ハトシェプスト女王がアメン神の命を受けてプントに遠征隊を派遣するところから、遠征隊のプントでの活動、持ち帰った品々を計測、記録し、アメン神に捧げる場面、そして遠征成功の報告を女

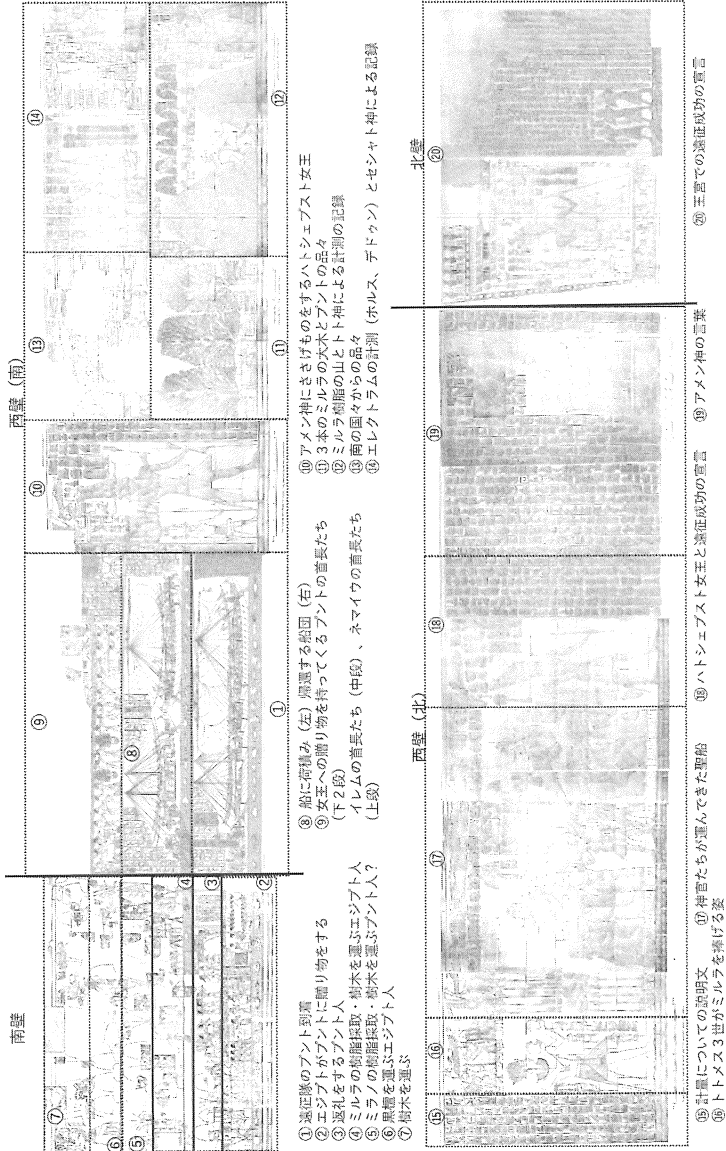


図 1 デル・エル・バハリ、ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフ展開図  
(Neville 1898, pls. LXXXVIII-LXXXVI; Mariette 1887, pl. VI; Smith 1962, 60 より作成)

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

王がアメン神と人々に行うところまでを描いている。

この一連のレリーフの中で特に注目を集めているのが、エジプトの遠征隊がプントに上陸し、活動する様子を描いた南壁（図2）である。南壁には遠征隊の交易活動<sup>2</sup>だけでなく、プントの植物や動物、プント人とその住居なども描かれており、これら動植物の種の特定や生息範囲を明らかにすることで、プントの位置特定の材料を提供しようとする博物学的、民族学的な研究が行われてきた<sup>3</sup>。一方で、プント・レリーフに描かれている動植物が示す意味や象徴性については、ほとんど触れられることがない。そこで本稿では、ハトシェプスト女王のプント遠征における最も重要な獲得品であるミルラ（*ntyw*）の木の象徴的な側面にアプローチしてみたい。ミルラとは赤みがかった樹脂性の香料<sup>4</sup>で、神殿の儀式には欠かせないものであり、プントはミルラの産地として古代エジプト人に認識されていた。プント・レリーフには、アメン神がハトシェプスト女王に「プントへの道を捜せ、ミルラの地への道を開け！水路と陸路で遠征隊を導け！」（*Urk.* IV, 349）と命じてプント遠征が実行されたと記され、ミルラの獲得が第一の目的であったことがわかる。さらにミルラの樹脂だけでなくそれを産出する木も持ち帰っており、プント・レリーフの中でミルラの木と樹脂の山は最も目立つように大きく描かれている（図1⑪⑫）。

プント・レリーフにおいてミルラの木が描かれている場面を、以下、番号にしたがって簡単に解説を行う。まず、南壁の3、4段目のミルラの木を掘り出し、根をポットに入れて運ぶ場面（図1・2④⑤）、西壁中段のプント沿岸部でエジプトの船にプントの産物を積み込む場面（図1・3⑧）、さらにその上部に描かれたプントの首長たちがハトシェプスト女王にプントの産物を持ってくる場面（図1・3⑨）、そして西壁中央部下段の計量の場面において、持ち帰った木のうち3本は植樹され、残りは根をポット入れたまま並べら得ている場面（図1⑪⑫）である。

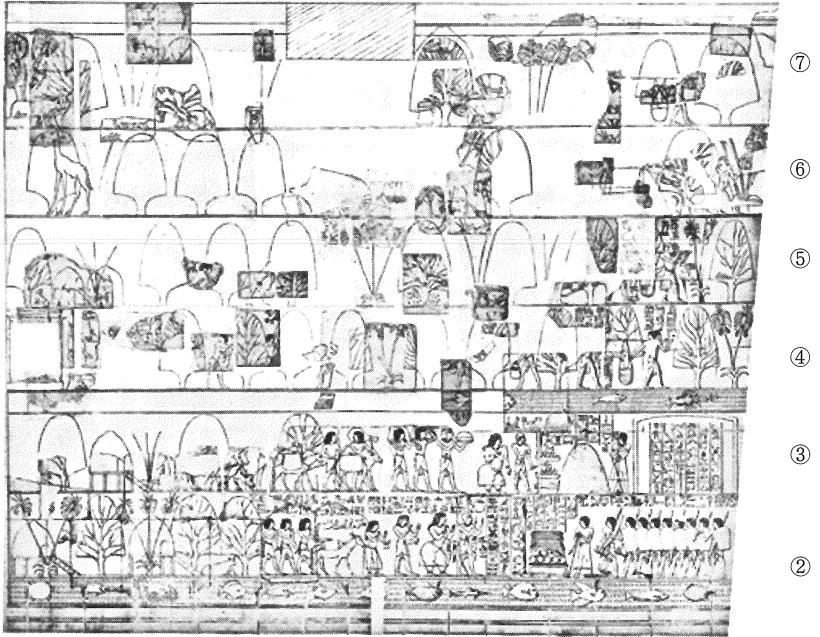


図 2 プント・レリーフ南壁 (Smith 1962, 60)

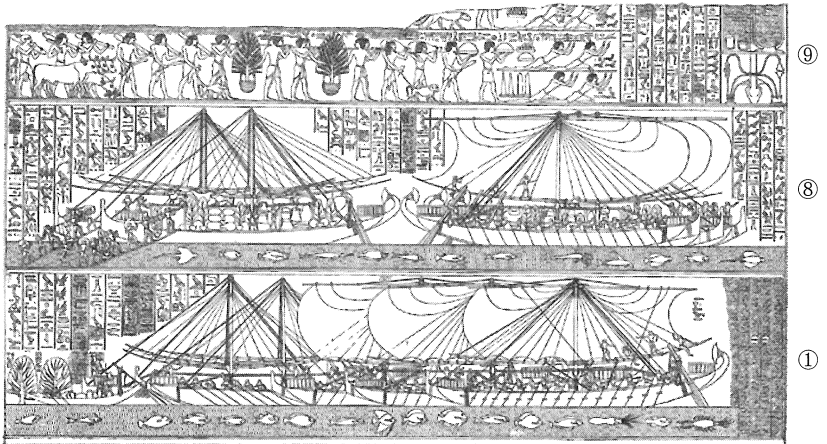


図 3 プント・レリーフ西壁南端 (Mariette 1877, pl. VI)

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

これらのミルラの木を描き方をみると、2種類存在することに気づく。一方は幹と枝、葉の輪郭を描いたのみのシンプルな木であり、他方は幹と枝、葉を一枚一枚細かく描き、葉が生い茂っているかのような木である。この図像表現の差異については、すでに20世紀前半からR. O. シュトイアーや (Steuer 1943, 280) A. ルーカス (Lucas 1937, 28; 1962, 92) らによって指摘され、木の種を特定する材料として議論されてきた<sup>5</sup>。さらに幹と枝、葉の輪郭のみが描かれている木はプントの地を描いた場面であり、幹と枝、葉を一枚一枚細かく描いている木はエジプトに到着して以降の部分であることを、D. M. ディクソンが指摘している (Dixon 1969, 57)。

このような木の図像表現の差異をめぐる議論は、植物学的な観点を中心にしており、プント・レリーフの中でミルラの木を描き方が異なっていることについて、象徴的な側面から深く議論されることはなかった。また、図像の解釈に偏り、ミルラの木についてのテキストに注目した研究も少ない。そこで本稿では、まずミルラの木の写真表現の差異についての先行研究をたどり、これまでの植物学的な解釈についての再検討を行う。そしてプント・レリーフにおけるミルラの木の写真表現と図像表現とを合わせて分析し、この木の描写の差異がプント・レリーフの中でどのような意味を持つのかを検討していく。

## 第1章 ミルラの木の写真分けと先行研究

前章で述べた通りプント・レリーフにおける木の描き方の違いについて最初に議論となったのはシュトイアーとルーカスであった。シュトイアーは、*ntyw* がミルラであることを証明するために、プント・レリーフの分析を行った。その中で、木の描き方の違いはミルラの木の写真2つの様相を示

しているとした。これを受けて、ルーカスは乳香について記した項目において、幹と枝、葉の輪郭のみが描かれている木を「全く葉がない」形、幹と枝、葉を一枚一枚細かく描いている木を「葉の生い茂った」形と表現した。そしてショッフの見解（Schoff 1912, 218f）を根拠に「全く葉がない」木はミルラかソマリアの乳香であり、「葉の生い茂った」木は南アラビアの乳香であると示唆した（Lucas 1937, 28; 1962, 92）。すなわちルーカスは木の表現形態の差異が種の違いを示すと考えた。これに対しシュトイアーは、ルーカスが木の形態から *ʾntyw* を乳香と判断したことに、木の表現形態を重視し過ぎであると批判した。さらに木の表現は科学的というよりは芸術的な重要性が高く、木が植物的特徴を表すものではないと主張した（Steuer 1943, 280）。これら二人の議論は、*ʾntyw* がミルラか乳香かという種を特定することに主眼が置かれているが、木の表現形態の差異について、ルーカスは植物学的な特徴による解釈を行なっていることに対し、シュトイアーが植物学的な観点からの解釈を否定していることがわかる。

一方で植物学的な観点において、ルーカスの主張に異議を唱えたのがディクソンであった。ディクソンは、枝と葉の輪郭のみが描かれた木は、「全く葉がない」こと表現してはいないと反論した。その根拠に、「全く葉がない」とされる木には、葉の輪郭の内側に緑の彩色が施されていることを示した。


さらに葉の輪郭のみを描いた木は若木で、葉を細かく描いた木は成長したものであり、表現形態の違いは成長段階の差異であると提案した。その理由として、木の移植には成長した木よりも若木の方が適していることを挙げ、葉の輪郭のみを描いた木はプントで掘り起こされた段階ではまだ若く、葉が十分に開いていないだけであると推測した。

この見解を補強するためにディクソンは、ミルラの木のプロット表現を用い、次のように解釈した。テキストには、*nhwt nt ʾntyw w3d*（新鮮、

ハトシェブスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

あるいは緑のミルラの木々」とあり、*w3d*は「新鮮」や「緑」を意味するエジプト語であるが、プント・レリーフにおいてミルラは赤褐色に描かれているため、「緑」よりも「新鮮」という意味で捉えることが適切である。したがって *nhwt nt 'ntyw w3d* は「新鮮なミルラを産出する木々」を意味している。このようにディクソンはテキスト表現も合わせて、葉の輪郭のみを描いた木の図像表現は、「新鮮なミルラを産出する木々」であり、樹脂採取のために傷をつけられていない若木を表現したものであったと解釈した (Dixon 1969, 57)。

一方、A. A. サラーハはルーカスの意見を取り、形態の相違は異なる2種類の木を表し、一方は葉がない種、あるいは刺々しい様相の種であり、他方は最初から葉が生い茂っているものであると主張した (Salhe 1972, 143)。

このような植物学的な観点からの解釈に対し、K. キッチンは、葉の輪郭を描いた木はヒエログリフの  の形と同じであることを指摘し、図像表現から種を特定することが難しいと主張している。また葉を細かく描いているのは木が主要なものとして描かれている場面で、輪郭のみの木は、風景や船荷の一つにしか過ぎないため詳細に描かれていないとした (Kitchen 1970, 185f)。

以上、木の表現形態についての議論は、実際の木の形態や状態を表現していることを前提とした植物学的な解釈が中心となっている。木の図像表現の違いは、「葉の有無や状態」とそれに伴う「種の違い」や「成長段階の差異」のいずれかを表現したとする解釈である。一方で、植物学的な差異を示しているのではなく、その場面において重要な要素か否かで表現が異なるという表象的な解釈においては、議論が深まっていない。

## 第2章 植物学的な解釈の再検討

本章ではミルラの木の写真表現の違いが植物学的に解釈しえるのか、前章の議論を中心に検証していく。

まず、「葉の有無や状態」についてみていこう。ルーカスが「全く葉がない」と表現する葉の輪郭のみを描いた木については、先述したディクソンの指摘の通り、「全く葉がない」ことを表現してはいない。プント・レリーフ南壁に描かれたミルラの木および西壁の船に運ばれている「全く葉がない」とされる木には、葉の輪郭の内側に着色された緑色を現在でも確認できる。

また、ハトシェプスト女王期のアメン第一神官であったハブセネブの墓(TT67号墓)には、プントの様子を描いたと考えられる壁画がある(図4)。

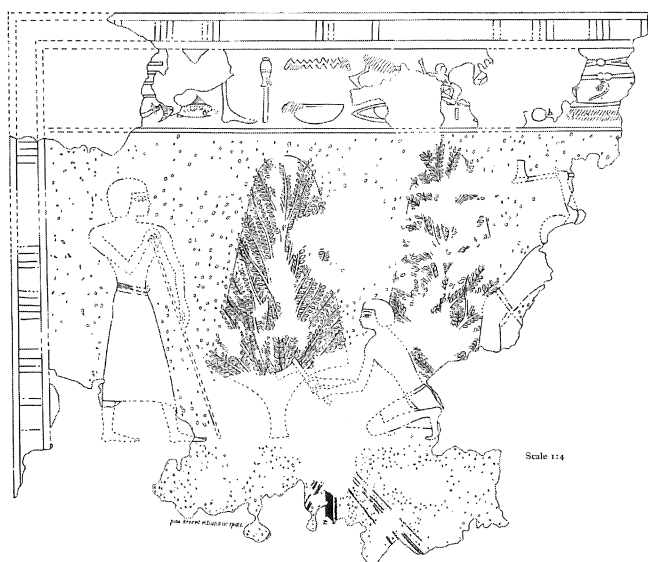


図4 ハブセネブ墓壁画のプントにおける活動場面 (N. M. Davies 1961, 19)



ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

長杖を手にしたエジプトの高官の前に2本の木と手斧を手にした2人のエジプト人が、その下方にはエジプト船のマストと索具が描かれている。調査を実施したN. M. デイヴィスは、壁画の背景は赤、青、白の斑点が散りばめられたピンク色の砂漠を表現していることから、この壁画はプントにおける活動の様子を示しているとした(N. M Davies 1961, 19f)。

壁画の中心いる人物が、座った姿勢で木に手斧を当てている姿は、樹脂を採取するために木に傷つけている場面と捉えられる。興味深いのは、この2本の木に、葉の輪郭だけでなく一枚一枚葉が細かく描かれていることである。さらにデイヴィスによると、幹と枝は黄色、葉は緑色に着色されていた。手斧で木を傷つける図像は、プント・レリーフの南壁4段目(図1・2⑤)にある手斧で木に傷をつけて樹脂が出る様子を描いた場面と共通している。つまり、ハプセネブの墓壁画のように、ハトシェプスト女王の遠征隊が樹脂を採取した木に実際は葉が付いていたが、プント・レリーフには描かれていない可能性が高い。

次に「成長段階の差異」について検討する。ディクソンは、葉の輪郭のみを描いた木を「傷をつけられていない若木」と解釈しているが、レリーフの描写とは矛盾している。プント・レリーフ南壁では、3段目において樹脂を採取している様子、4段目において木を手斧で傷つけ、樹脂が出ている様子を確認できる。傷つけ、樹脂を採取している木は、葉の輪郭のみを描いた木である。したがって、ディクソンが主張するように葉の輪郭のみを描いた木が、傷を付けられていない若木で、葉が十分開いていない状態とは考えにくい。このことから葉の表現形態の違いが「成長段階の差異」を示すとする解釈は否定せざるをえない。

続いて、「種の違い」について考察する。木が描かれている場面を時間軸に沿って見ていくと、まず南壁3、4段目(図1④⑤)のプントで木を掘り起こして運び出す場面は、西壁中段(図1⑧)に描かれた船に積荷を

運ぶ場面へとそのまま続く。そして、西壁上段（図1⑨）でプント人たちがハトシェプスト女王に、ミルラの木をはじめとしたプントの産物を持ってくる場面へと続いている。このように木が持ってこられた過程は、プントからエジプトまで一連の流れとして捉えることができるため、同じ木を運搬していると考えるのが自然である。

さらに、場面によって木の形態が統一されて描かれていることにも注目したい。各場面で描かれる木の形態は同じであり、一場面の中で個体差を示していない。種類が異なることを示す意図があれば、一場面で異なる描き方がされていたであろう。したがって、表現形態の違いが「種の違い」を示すとした解釈も支持し難い。

ではミルラと種が異なる木がどのように描かれているのか。南壁のプントの場面では、ミルラの木以外にもドームヤシの木と黒檀の木が描かれている。ドームヤシの木は主幹が分岐する特徴を持ち、古代エジプトにおいても植物学的な特徴を捉えた描き方がなされてきた。それに対して黒檀の描き方は、ミルラと同様に特徴を示していない。南壁の5、6段目（図1⑥⑦）中央部分に、黒檀を運ぶ人々の足元に切り倒された黒檀の木が一部描かれているが、この木の形態は、同じく南壁で描かれているミルラの木とほぼ同じように、枝と葉の輪郭のみを描いた形態をしており、ミルラの木との違いを示すことは困難である。すなわち、ミルラも黒檀も異なる種の木でありながら同様の形態で描かれており、ミルラの木について刺々しい枝や上部にいくほど広がる枝ぶり、葉が少ないという特徴が、全く表現されていない。よって、プント・レリーフのミルラの木が植物学的な特徴を示していないことは明らかである。

ここで、新王国時代の貴族墓に描かれたミルラの木と比較してみよう。プントとの交易場面で、ミルラの木を描いているのは次の4つの貴族墓である。ハブセネブ（TT67号墓、図4）、ピュイムラー（TT39号墓、図5）、

ハトシェプスト女王葬祭殿のブント・レリーフにおけるミルラの木について

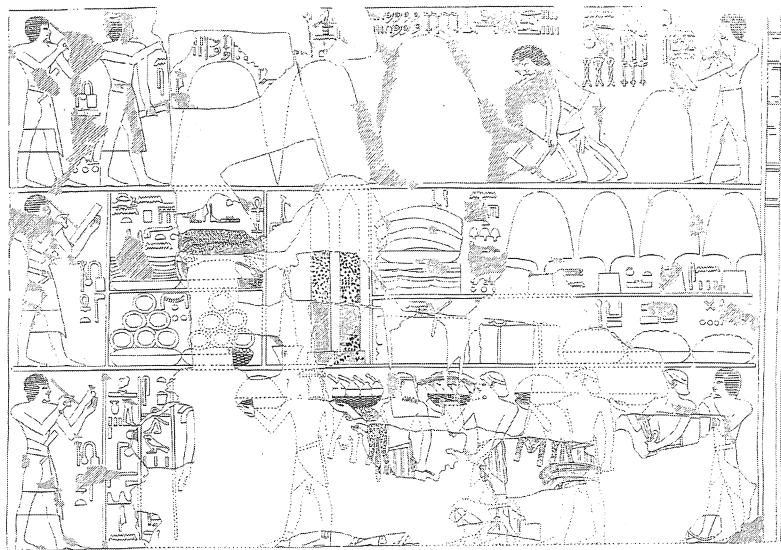


図5 ピュイムラー墓のブント朝貢図 (N de G. Davies 1923, pl. XXIII)

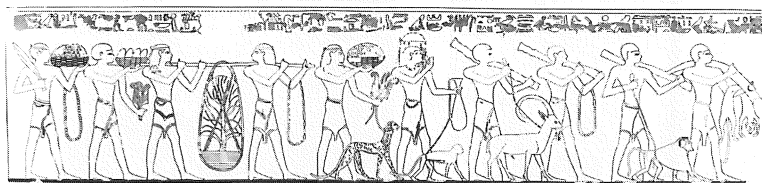


図6 レクミラ墓のブント朝貢図 (N de G. Davies 1943, pl. XVII)

レクミラ (TT100 号墓、図6)、墓主不明 (TT143 号墓、図7)。ミルラ  
の木が2本以上描かれているハプセネブ、ピュイムラーの墓壁画では、そ  
れぞれ葉を細かく描いた木、葉の輪郭のみを描いた木に描写が統一されて  
おり、葉の有無は貴族墓ごとで統一されていることがわかる。またこれら  
4基の貴族墓に共通していることは、ミルラの特徴は描かれず、基本

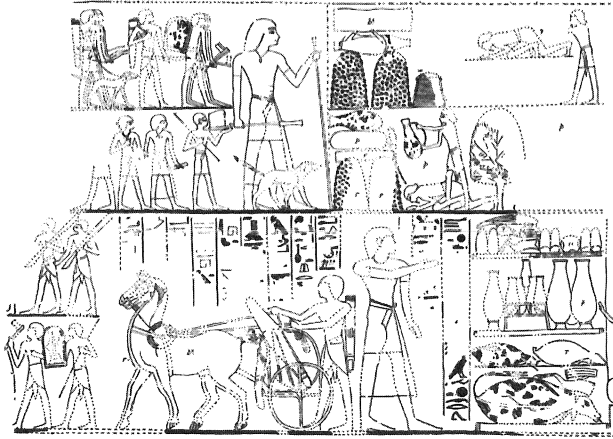


図7 TT143号墓のプント朝貢図 (N de G. Davies 1935, 48)



図8 カルナック神殿「植物園」の壁画（筆写撮影）

的にはプント・レリーフと同じく「木」を描いている点である。

以上見てきたように、ミルラの木の間像表現を、植物学的観点から説明

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について  
することは難しい。外国の動植物を特徴的に描いた「植物園」<sup>6</sup>のレリーフ（図8）と比較しても、ミルラの木がいかに特徴なく、キッチンが指摘するようなヒエログリフの𓆎とほぼ同形、すなわち一般的な「木」として表現されているかを見て取ることができる。

### 第3章 テキストにおけるミルラの木

プント・レリーフにおいて、あえて葉の輪郭のみの木と葉を細かく描いた木とを区別して表現したのはなぜであろうか。木が重要な場面か否かで描き分けが行われていたとするキッチンの見解は、古代エジプトの図像表現のスタイルから見れば当然であろう。しかしこのような表層的な解釈に留まることなく、木の差異が示す意味をより深く考察していくために、これまであまり目を向けられることがなかったミルラの木の写真表現に注目したい。なぜならば図像表現と写真表現とを合わせて考察していくことで、木の差異が示す表象的な意味をより深く読み解くことができると考えられるからである。

プント・レリーフにおいてミルラの木が写真でどのように表現されているのかをみていくと「ミルラの木 (*nht 'ntyw*)」「新鮮なミルラの木々 (*nhwt nt 'ntyw w3d*)」「常に新鮮なミルラを生むしっかりとした木々 (*nhwt mn hr 'ntyw w3d*)」の3種類あることが確認できた。以下、上記3つの表現がレリーフのどの場面で使用されているか見ていこう。

まず、「ミルラの木 (*nht 'ntyw*)」の表現は、南壁3段目のミルラの木を運ぶエジプト人の男たちの上部に刻まれている (*Urk. IV, 327-328*) (図1・2④)。一本のミルラの木をポットに入れ、それを前後三人ずつで肩に乗せた棒に紐をかけて運んでいる場面である。

ミルラの木を運ぶ人々の横（図1・2④）

我々と共に来たれ、神の地の中心にあるミルラの木、アメンの家（神殿）へ。汝（木）の場所があるはずだ。汝が彼（アメン）の神殿において、マアトカーラーのために成長せんことを、彼女の父が命じたように。（*Urk. IV*, 327-328）

次に「新鮮なミルラの木々（*nhwt nt 'ntyw w3d*）」が記されているのは、西壁南端の中段に描かれた積荷の場面（図1・3⑧）、3本のミルラの大木の横（図1⑫）、そしてアメン神の言葉（図1⑬）の3箇所である。

プントからの出発準備をする船団の左側（図1・3⑧）

プントの地の素晴らしい品々を船に満載する。神の地のあらゆる種類の素晴らしい植物、ミルラの樹脂の山、新鮮なミルラの木々、黒檀、きれいな象牙、アムの地の緑色の金、ティシエペスの木とケシトの木、イヘメト（*ihnt*）、乳香、眼の化粧品、ヒヒ、サル、獬犬、南方のヒョウの皮、召使とその子供たち。（*Urk. IV*, 328-329）

3本のミルラの大木の右（図1⑫）

31本の新鮮なミルラの木々、プントの素晴らしいものとしてもたらされた。この神アメン、二国の玉座の主の権威のために。太古からこのようなものは見たことがない。（*Urk. IV*, 334-335）

ミルラの大木の右側には、ミルラの樹脂の山とそれを計測する様子が描かれている。ミルラの樹脂の上部には「新鮮なミルラ（*'ntyw w3d*）の山」と記されている。

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

アメン神の言葉（図 1⑱）

彼ら（遠征隊員たち）が望むようにミルラを採取し、彼らの心が満足するまで、新鮮なミルラの木々、この国のあらゆる素晴らしい品々を船に積み込んだ。（*Urk.* IV, 345）

最後に、「常に新鮮なミルラを生むしっかりとした木々（*nhwt mn hr 'ntyw w3d*）」が記されている部分は、アメン神の言葉の中にある（図 1⑱）。

ミルラの山、常に新鮮なミルラを生むしっかりとした木々が祭祀場に  
神々の主が見るために、集められてしまっている。それらに囲まれて  
我を楽しませるために、汝自身が我が神殿の両側の庭にそれらを植  
えるべし。（*Urk.* IV, 346）

以上、ミルラの木に関するテキストが書かれた場所を見ていくと、「ミルラの木」と書かれているのは、南壁のプントの場面のみであり、西壁のエジプトへの積荷になった段階から「新鮮なミルラの木々」という形に変化していることは、注目すべき点である。第1章で見てきたように、ディクソンは「新鮮なミルラの木々」が「新鮮なミルラを生産する若い木」の意味であることを示し、葉の輪郭のみを描いた木がそれに相当すると主張した。しかし、「新鮮なミルラの木々」という表現は、葉の輪郭のみを描いた木よりもむしろ葉を細かく描いた図像とともに用いられている。すなわちディクソンの主張とは逆に、葉を細かく描いた木こそが「新鮮なミルラの木々」であり、「新鮮なミルラを生産する若い木」を表現していると考えられる。エジプトへの積荷の場面からテキスト表現が変わることから、エジプトに運ばれることが確定したミルラの木に対して、「新鮮なミルラ

の木々」というテキスト表現を用いたと推測される。

そして「新鮮なミルラの木々」を持ち帰る目的が、プント・レリーフの中で繰り返し述べられている。上記のテキストに加え、プント・レリーフの北壁（図 1②⑩）に刻まれた、女王が宮殿において遠征の意図と成功を報告する場面には、以下のように記されている。

治世第 9 年、我は謁見の間で座する。〔中略〕木は神の地で掘り起こされ、（エジプトの）地に置かれた……神々の王のために。我が神々の主に従うために、神々の手足の軟膏を絞るためにミルラはそこからもたらされた。〔中略〕彼（アメン）が我に命令を与えた。彼が自らの神殿にプントを作ることを命じた。〔中略〕神の地の木を神殿の両側に、庭に植えるために、彼がそれらが起こるよう命じたように、我が神々の主のために命じた祭祀場が素晴らしくなるために。〔中略〕我は彼のために、テーベのために、彼の庭にプントを作るであろう、彼が我に命じたように。彼がそこを巡れば、そこ（プント）は彼のために大きくなるであろう…。（*Urk. IV, 349-354*）

以上のテキストから、ミルラの木移植は、アメン神に命じられて、神殿の庭に植えるために実行されたことが繰り返し述べられていることがわかる。持ち帰られたミルラの木々はデル・エル・バハリのハトシェプスト女王の葬祭殿前、あるいはカルナックのアメン神殿の庭に植えられたとされるが、痕跡が発見されていないため、実際に植樹されたかについては議論となっている<sup>7</sup>。植樹が行われたか否かは別として、このテキストが示す重要な点は、ハトシェプスト女王がアメン神の命令に従って神殿の庭にプントを作るため、ミルラの木々を持ち帰らせたことである。神殿の庭にミルラの木々を植えることには、ミルラの木を栽培して樹脂を採取すると



ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について  
いう実用的な意味と、プントを作るという象徴的な意味が含まれていると  
解釈できよう。

ミルラ樹脂を採取しようとした意図は、「神々の手足の軟膏を絞るためにミルラはそこからもたらされ」から読み取ることができる。つまり儀式で神像に塗布する芳香性の軟膏を作るためである。本来、神殿の庭の役割には、供物や儀式で使用する植物の育成も含まれ、ミルラの木は、軟膏だけでなく、儀式で使用する薫香のために樹脂を採取する目的で育てられたと考えられる。そのためには、ディクソンが主張するようにミルラの樹脂が採取できるようになった木が必要である。すなわち「新鮮なミルラ」とは採取したてのミルラの樹脂であり、エジプトに持ち帰ったミルラの木が、樹脂を産出することが可能な「しっかりとした」木であったことを強調する必要があったのではないだろうか。そのため健康的でしっかりとした木、生命力に満ちた木を、プント・レリーフにおいて視覚的に捉えさせる工夫が求められた。それが、葉を細かく描いた木という図像表現であったと推測される。

次にプントを作ることとは、「神の地」であり「ミルラの地」であるプントをエジプトにおいて再現することである。レリーフ西壁の中心部に描かれている3本のミルラの大木とその下を歩く牛たちの構図は、南壁2段目、6段目に描かれた木々の横を牛が歩く場面と共通していることから、エジプトに再現されたプントを表現していると考えられる。

そして3本のミルラの大木は、プントの場面より相対的に大きく描かれている。これは何を意味しているのか。上記のテキストには、木の成長について次のようにある。南壁のプントでは木の運搬人が「汝（木）が彼（アメン）の神殿において、マアトカーラーのために成長せんことを、彼女の父が命じたように」と言って運んでいる。さらに女王が宮殿における報告で「彼がそこを巡れば、そこ（プント）は彼のために大きくなるであ

ろう…。』と述べている。つまり、プントから運ばれ、神殿の庭に植えられたミルラの木は、ハトシェプスト女王のために成長することが願われ、そしてアメン神が巡ったこと、言うなればアメン神の力によってより大きくなると読み取れる。テキストの中で繰り返されるアメン神の命令によって行われたこと、そしてアメン神が巡ったことによって大きくなる木々は、ハトシェプスト女王のためであり、それを成したのはアメン神の威光である。3本のミルラの大木は、これらのことを表象していると解釈できないであろうか。

#### 第4章 サフラー王のプント・レリーフとの比較

プントから木を持ち帰ったのは、ハトシェプスト女王の遠征隊が初めてではない。第5王朝のサフラー王もまた、プントに遠征隊を派遣し、プントの産物を持ち帰った様子をレリーフに残した。本章では、ハトシェプスト女王以前にプントに遠征隊を派遣したサフラー王のプント・レリーフと比較して、ハトシェプスト女王のプント・レリーフにおける木の描写が象徴的なものであることを提示したい。

サフラー王のプント・レリーフとは、サフラー王がプントに派遣した遠征隊が帰還した様子を描いた2つのブロックからなるレリーフで（図9）、2003年にアブシールにあるサフラー王のピラミッド複合体の参道で発見された。それまで、前2450年にサフラー王がプントからミルラをはじめとした産物を受け取っていたことは、パレルモストーンに記録されていたが、実際に交易を行っていたかどうか疑念を持つ研究者もいた。しかし、2003年に発見された新たなプント・レリーフの存在が、実際に交易を行っていたことを確信させるものになった。サフラー王のプント・レリーフの一方のブロックには、プントからの帰還の様子と香料の木に手斧で傷

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

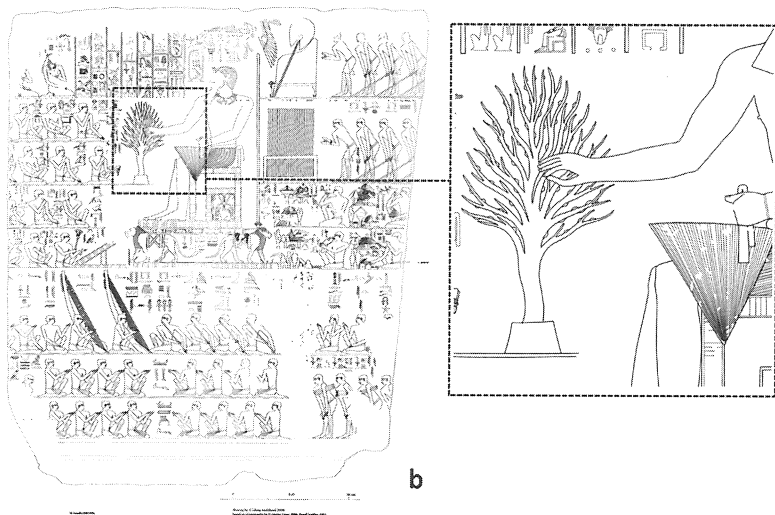
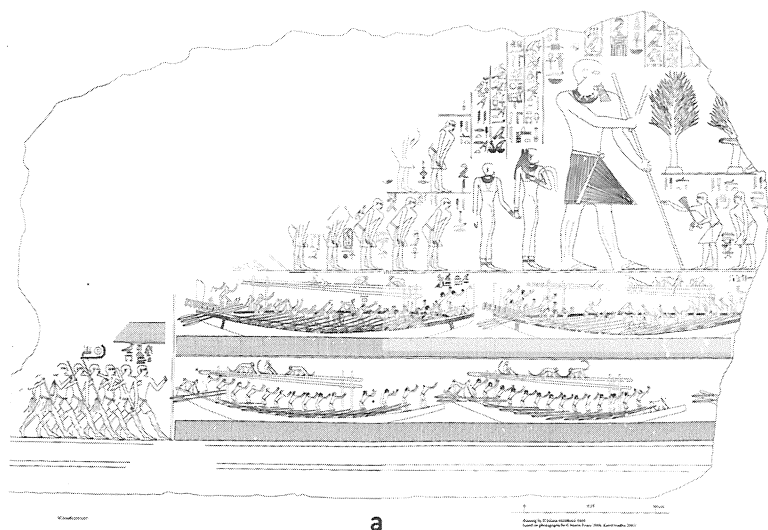


図9 サフラー王のプント・レリーフ (el-Awady 2009, pls.5f)

をつけるサフラー王（図 9a）、他方のブロックには、遠征の成功を祝う宴会の様子が刻まれていた（図 9b）。

帰還の場面が描かれたレリーフから、帰還した船が少なくとも 5 艘あり、船にはエジプト人だけでなく、子供を含むプント人とヒヒやサル、猟犬などを連れ帰っている様子がわかる。また船団の上部には、大きく描かれたサフラー王、その後ろに王母と王妃と考えられる女性が続く。サフラー王の前には、ポットに入れられた香料の木があり、王は自ら手斧で木に傷をつけている。

もう一方のレリーフには、遠征の成功を祝う宴会の場面で、王が傷をつけた木から滲出する樹脂をつまみ取る様子が描かれている。サフラー王のレリーフに描かれている香料の木は「アネドの木 (*nht nt 'nd*)」と表記され、図像において樹脂を表現した粒が黄色を帯びた乳白色であったことから、T. アワディは乳香の木と解釈している (el-Awady 2009, 169)。乳香はミルラとは異なる種であるが、ともに樹脂が香料として用いられ、エジプトには欠かせない香料の 1 つである。乳香の木である可能性が示されるものの、注目すべきは香料の木の描き方である。木の枝から粒状の樹脂が出ている様子を描写していること、そして一般的に乳香の方がミルラよりも葉が多いにもかかわらず一枚も葉を描いていないことは、極めて興味深い。なぜならハトシェプスト女王のプント・レリーフでは、「新鮮なミルラの木々」というテキストが添えられているにもかかわらず、エジプトに持ち帰ったミルラの木には滲出した樹脂である「新鮮なミルラ」が一粒たりとも描かれることなく、かわりに葉を細かく描き、葉が生茂る形態で表現されているからである。ハトシェプスト女王のレリーフで樹脂が出ている様子は、プントでの活動を描いた南壁だけであり、エジプトに到着してからは描かれていない。サフラー王のレリーフと比して、ハトシェプスト女王のレリーフが、ミルラ樹脂ではなく、いかに生命力溢れた「しっか

ハトシェプスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について  
りとした木」を描くことを重視したのか、そしてそれを象徴的に描いていたのかを看取することができよう。

樹脂を捧げた対象もまた、ハトシェプスト女王のレリーフと比較する上で、注目に値する。香料の木の上部に刻まれたテキストに、王は収穫した樹脂を王母に捧げたことが記されている (el-Awady 2009, 169)。サフラー王が最初に樹脂を捧げたのは、神ではなく、現実存在していた王母である。これに対して、ハトシェプスト女王はアメン神のためにミルラの樹脂や木を持ち帰り、捧げている。実在する人物に与えた記述は一切ない。つまり、2つのレリーフを比較すると、ハトシェプスト女王のレリーフがアメン神を中心に据え、宗教的な要素を強く持つことがより明白になった。それは、プント遠征がアメン神の命令に従って、アメン神によりプントへ導かれ、そしてアメン神のために実行されたことが繰り返し言及されていることからわかる。

以上、ハトシェプスト女王のプント・レリーフとサフラー王のプント・レリーフと比較してきた。両者の木の描き方や捧げる対象を見ていくと、ハトシェプスト女王のレリーフにおいてエジプトに持ち帰ったミルラの木が、実際の姿に近い描写ではなく、いかにアメン神の力やしっかりとした木を表象しているかを浮かび上がらせる結果となった。

## おわりに

ハトシェプスト女王のプント・レリーフにおけるミルラの木の間像表現の差異について、これまで行われてきた植物的な見地から解釈することが難しいことを示した。そして木の表現について間像表現の差異のみならず、テキスト表現にも差異があることを明らかにし、合わせて検討を行った。これらの検討作業を通して、ミルラの木の間像表現を差異化したことに、

2つの意味があったと考えられる。まず、プントの場面では葉の輪郭のみを描いた木、エジプトに持ち帰った木は葉を細かく描いた木として表現することで、ミルラを産出できる健康的な「しっかりとした木」をエジプトに持ち帰ったことを強調する意味を持ち得た。そして、レリーフに印象的に描かれた3本のミルラの大木は、持ち帰った木を神殿に植えてプントを再現したことを表し、アメン神によって大きく成長した様子、すなわちアメン神の威光を表象していると解釈しえないだろうか。

テキストで繰り返されるアメン神についての言及、そしてアメン神の威光を示すような木の表現は、この遠征やミルラの植樹と栽培にアメン神官団が深く関わっていたことを示唆している。ハトシェプスト女王のプント・レリーフは、アメン神の命を実行し、プントとの直接交易を成功させた女王のプロパガンダとしてだけでなく、背後にアメン神官団が存在することを示した政治的な意味も持つかもしれない。

#### 注

- 1 プントの位置について最初に言及したのはウィルキンソン卿であった (Wilkinson, 1847)。当初は香料の産地であるアラビア半島と考えられていたが、その後、東アフリカの香料の産地であったソマリア、エチオピア、エリトリア、南スーダンなどが次々と提示されてきた。これらの議論は、ブライヤーによって地図上にまとめられている (Breyer 2016, 787f)。
- 2 南壁に描かれた交易活動、特にプントとエジプトとの交換場面について解釈は、拙稿を参照されたい (古川 2000)。
- 3 代表的なものとしては、レリーフに描かれた魚類の特定 (Danelius 1967) や木の種の特定 (Hepper 1969) 等の個別研究や、ヘルツォークによる民族学的な調査研究 (Herzog 1968) などがある。
- 4 *ntyw* はミルラを指すのか乳香を指すのかで議論となっていたが、プント・レ

ハトシェプスト女王葬祭殿のブント・レリーフにおけるミルラの木について

リーフに描かれている *htyw* の山は、赤褐色をしていることから、白っぽい乳香樹脂とは考え難く、現在ではほぼミルラとされている。

5 彼らの議論以前に W.H. ショフは、葉が生い茂ったように描かれた木についてのみ言及している。ショフはミルラにはほとんど葉がなく、トゲトゲしく、三つ葉であり、ソマリアに自生する乳香の木もほとんど葉がないため、葉が生い茂ったような木はアラビア半島に広く自生している乳香の木であると主張している (Schoff 1912, 218f)。

6 カルナック神殿の通称「植物園」と呼ばれる部屋には、トトメス 3 世がアジア遠征において関心を持った外国の動植物が特徴的に描かれている。

7 現在ハトシェプスト女王葬祭殿前に、「ブントからもたらされた木」として公開されている根株は、ワニナシの木であることが判明しており、ミルラの木ではない。A. ウィルキンソンは、持ち帰ったミルラの木は植樹されず、ハトシェプスト女王葬祭殿のテラスにポットに入れられたまま並べられたと主張している (Wilkinson 1998: 84-87)。これに対し、D. ミークスは、スペオス・アルテミドスの碑文に「新鮮なミルラを生む木々の大地」という記述があることから、テラス栽培でなく植樹されたと考えている (Meeks 2002, 282)。

## 略記号

*BMMA: The Metropolitan Museum of Art Bulletin*

*JAOS: Journal of the American Oriental Society*

*JARCE: Journal of American Research Center in Egypt*

*JEA: Journal of Egyptian Archaeology*

*Urk. IV: Sethe, K., 1905: Urkunden der 18. Dynastie, Urkunden des Ägyptischen Altertums, IV, Leipzig.*

参考文献

- el-Awady, T. 2009: Abusir XVI: *Sahure - The Pyramid Causeway: History and Decoration Program in the Old Kingdom*, Prague: Czech Institute of Egyptology.
- Breyer, F. 2016: *Punt. Die Suche nach dem ›Gottesland‹*, Leiden: Brill.
- Creasman, P.P. 2014: "Hatshepsut and the Politics of Punt," *The African Archaeological Review* 31/3, 395-405.
- Danielius, E. and H. Steinitz 1967: "The Fishes and Aquatic Animals on the Punt-Relief at Deir el-Bahari," *JEA* 53, 15-24.
- Davies, N. de G. 1923: *The Tomb of Puyemre at Thebes*, 2 vols., New York: MMA.
- Davies, N. de G. 1935: The Egyptian Expedition 1934-1935: *BMMA* 30 (sect2, November), 46-57.
- Davies, N. de G. 1943: *The Tombs of Rekh-mi-re at Thebes*, New York : MMA.
- Davies, N. M. 1961: "A Fragment of a Punt Scene," *JEA* 47, 19-23.
- Dixon, D. M. 1969: "The Transplantation of Punt Incense Trees," *JEA* 55, 55-65.
- Herzog, R. 1968: *Punt*, Glückstadt.
- Hepper, F. N. 1969: "Arabian and African Frankincense Trees," *JEA* 55, 66-72.
- Kitchen, K. A. 1971: "Punt and How to Get There," *Orientalia* 40, 184-207. 1993: "The Land of Punt," in T. Shaw, P. Sinclair, B. Andeah and A. Okpoko (eds.), *The Archaeology of Africa : Food, Metals and Towns*, London and New York.
- Lucas, A. 1937: "Notes on Myrrh and Stacte," *JEA* 23, 27-33.
- 1962: *Ancient Egyptian Materials and Industries*, 4<sup>th</sup> ed., rev. by J. A. Harris, London.
- Mariette, A. 1877: *Deir-el-Bahari: Documents Topographiques, Historiques et*



ハトシェブスト女王葬祭殿のプント・レリーフにおけるミルラの木について

*Ethnographiques Recueillis dans ce Temple*, Leipzig.

Meeks, D. 2002: "Coptos et les chemins de Pount," in *Autour de Coptos. Actes du colloque organisé au Musée des Beaux-Arts de Lyon (17-18 mars 2000)*, *Topoi Supplement* 3, Lyon, 267-335.

2003: "Locating Punt," in D. O'Connor & S. Quirke, (eds.), *Mysterious Lands, Encounters with Egypt* 5, London, 53-80.

Naville, E. 1898: *Temple of Deir el Bahari* III, Lodon.

1908: *Temple of Deir el Bahari* VI, Lodon.

Saleh, A. A. 1972: "Some Problems Relating to the Pwenet Reliefs at Deir el-Bahari," *JEA* 64, 140-158.

Säve-Söderbergh, T. 1946: *The Navy of the Eighteenth Dynasty*, Uppsala.

Schoff, W.H., 1912: *The Peruolus of the Erythraean Sea*, London, Bombay and Calcutta.

Smith, W. S. 1962: "The Land of Punt," *JARCE*1, 59-61.

Steuer, R. O. 1943: "Stacte in Egyptian Antiquity," *JAOS* 63, 279-284.

Wilkinson, A. 1994: "Symbolism and Design in Ancient Egyptian Garden," *Garden History* 22/1, 1-17.

Wilkinson, A. 1998: *The Garden in Ancient Egypt*, London: The Rubicon Press.

Wilkinson, J. G. 1847: *Manners and Customs of the Ancient Egyptians*, London.

古川桂 2000:「ハトシェブスト女王葬祭殿のプント・レリーフについて—交換場面を中心に—」『史泉』92, 16-33.